

## 2. 取組を進めるに当たり困難であった事例について

### A. コースワークの充実・強化

#### ⑤他分野の大学院生との共同研究の実施

##### 《人社系》

#### ●東京外国語大学総合国際学研究科言語文化専攻

##### 「高度な言語運用能力に基づく地域研究者養成」の事例

(具体的に何を実施し、何が困難であったのか)

他分野の大学院生が共同研究をする場合、例えば国際シンポジウムにおいて参加者間のテーマ共有の徹底は会議開催の成功を左右する鍵である。そのための事前の打ち合わせは、国が異なる場合必ずしも容易とは言えなかった。

(苦労したこと、困難であったことの具体的な要因は何だったのか、それにより実施内容がどのような影響を受けていたのか)

開催地が本学であれ他大学であれ海外の研究者を招へいする場合は早い時期からの準備が必要とされた。そのために申し入れや打ち合わせを目的とした担当者の出張も必要であった。また、大学院生を RA として起用した日本語校閲では、サービスの受け手に偏りが見られたため結果として校閲者にも偏りが見られた。

(どのように対応し、どのような結果が得られたのか、また、その結果が望ましいものではなかった場合、あらかじめどのように対応していれば適切であったのか、どうすればより良い結果を導くことができたのか)

会議開催に当たっては早い段階での準備と参加者の会議開催意義への理解を得るように努めた。日本語校閲におけるサービスの需要と供給のバランスの問題は、依頼の殺到する校閲者と依頼者間の信頼関係を築くことで相互の都合を調整した。